

肯定系アイドルの生涯ファンサに
選ばれて

とろろまぐろ

ここはあらゆる変態が許容され、あらゆる男性が肯定される世界。一部例外はあるものの基本的に否定を受けることは無い。

この世界の女性は生存権や参政権など基本的人権の最低限を保障されながら平等・教育・自由は、男性の決定を前提にした仕組みとなっている。

そして女性側は差別に玩具同然の立場に身を置き、むしろ甘んじることなく、それを自由であり誇るべき“権利”“慈悲”であると享受し、努力を怠らず心の底から感謝していた。歴史を遡ること一〇〇〇年以上も前、事の始まりは邪馬台国が建国される以前に存在した太古の巫女が受けた啓示が元だった。

巫女が巫女に成る以前は邪欲に支配された有名な売女で、人々から軽蔑と畏怖の視線を向けられていた。虐げられ村八分の扱いまで受けた末、廁の糞拭きと名付けられ、男の排泄後の尻を手や口で毎日綺麗に掃除していた。

彼女は拒絶しなかった。大好きな性行為が二度とできなくなるところ人間以下に見られることで、却って役得ではないかと快樂と歪んだ信仰の鎖に進んで繋がれた。

永世の絶頂の中で彼女は大きいなる存在から啓示を得る。

この世の在り方、並びに超自然的な存在と奇跡の正体。自分自身に運命づけられた役割と全うすべき使命の数々。性別には普遍的で、やはり絶対的な掟があるのだ。それを改め

て理解したとき、雄汁の海から彼女は森羅万象の力を宿し、やがて村の御神体として崇め奉られるようになった。

記録上、巫女の最期は三十二人目の赤子を孕んだ辺りで途絶えている。

しかし旦那に掛けたと噂される言葉だけは意味深に少なくとも残存していたらしい。

『私の魂継がれずとも神の御心なおも不滅なりて、悠久を遊に舞う』

『雌雄に弱者必滅、彼の者に雄者おらぬ。故に雌、便役は敬い難し』

※便役とは巫女の時代における排泄物処理を生業とする女性を指す。現代の肉便器。

1

個性豊かな五十人のメンバーから成るアイドルグループ“メビウスアンダー”は、テレビやネット、雑誌、ゲーム、果てはアダルトビデオに至るまで、関連するコンテンツを見ない日は無いほど国民的存在であった。

人気度を語る上で個々の明暗が分かれやすいが、突出してメディア露出が多くファンの支持を得ている者がいて、とりわけグループの雰囲気良好であることが知られている。

結成に伴う至上命令が彼女たちに結束をもたらしているのだ。

時は大手弱小、さらには地下勢力が加わるアイドル戦国時代において弱者男性という浮動的な客を掴むために何処も手段を選ばなかった。あまつさえ他所の運営が関与したあくだい商法・事件が世間を賑わせる中、歌とダンス、ファンサという正統派を貫き、メビウスアンダーは地道に栄光へのスターダムを駆け上がっていく。

二〇XX年某日、メビウスアンダー始動から三年の月日が流れた。

後にグループの統括的聖母と慕われる“浜崎紫苑”は、駆け出し時代から圧倒的な輝きを放ち、台風のように周囲を巻き込むポジティブシンキングと自己肯定感の高さが持ち味だ。

「オタクくんのお名前を教えてください」

「ふ、ふひ、小馬でしゅ」

「ありがとう。それじゃあ小馬くん、今日やるコトは知ってるかなあ？」

プリーフ一丁のいかにもモテなさそうな細身の男は言葉に詰まっていた。

互いの身長差は十cm。男は一六〇cmあまり、対する浜崎は一七〇cm以上。体格差は大人と子供ぐらいはあった。

「ありや聞こえないよお？」

四畳一間の激安激狭アパートにて、対照的に華やかなフリル付き超ミニスカートと乳輪丸見えのマイクロビキニ風衣装で惜しげも無く胸を張るアイドルが居た。

しばし天を仰いで、欲に取り憑かれた小馬に視線を配る。

萎えて俯いた短小陰茎を二の腕に押しつけてくる。

「ザーメン薄くて飲みやすかった。生産量が少ない貴重な薄精子を恵んでくれてありがとう♡ しつこく喉に絡んでこなくて胃にスルツと落ちていっちゃった。口当たり爽やかだしジヨッキ大まで飲みちゃうよ♡ おチンポ様、私の愛する旦那チンポ様、休憩して回復したらおまんこにもくださいね……♡」

陰茎にしつこく口づけする。口紅がうつり生々しいキスマークが亀頭、竿に金袋に、至る箇所へ跡を残していた。

独占欲が強いタイプでもある浜崎は一旦行為が終わって、精液臭のする息を両手に吐いて恍惚を浮かべた。

時計の針が僅かに進む。

部屋の構造上、狭いゆえに台所の真横にトイレが設計されている。

「小馬くう〜んトイレットペーパー持ってきて〜」

立て付けが悪く何かを引っ掻く音と共に扉が開かれる。

時代に逆行した和式便所に跨がって巨尻を突き出す、あられもない格好を見られてしま